

校長室だより
NO. 17
平成30年6月25日

すべては光る

梅園小学校長
たか すりょうへい
高須亮平

梅園再発見 24

～朝鮮通信使と御馳走屋敷

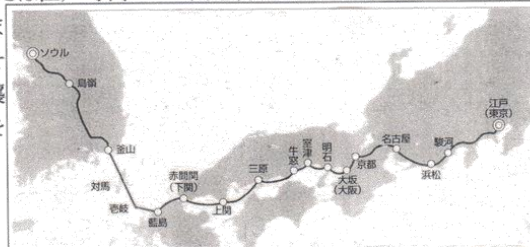


家康行列での朝鮮通信使

左の写真は、家康行列の「朝鮮通信使」の写真です。この行列は平成27(2015)年からこの行列に加わっています。朝鮮通信使とは、室町から江戸時代にかけて李氏朝鮮から日本へ派遣された外交使節団で、2017年10月、国際連合教育科学文化機関(ユネスコ)が主催する事業「世界の記憶」遺産に登録されました。

朝鮮通信使の当初の趣旨は、室町幕府の将軍からの使者と国書に対する高麗王朝の返礼でした。1375(永和元)年に足利義満が派遣した日本国王使に対して信を通わす使者として派遣されたのが始まりです。15世紀半ばから途絶えていましたが、安土桃山時代に李氏朝鮮から豊臣秀吉に派遣されました。しかし、その後の文禄・慶長の役で日朝間の国交断絶により中断されました。それから9年後の慶長12(1607)年、徳川家康が李氏朝鮮と対等の国交を回復し再開されました。この国交正常化は江戸幕府が高い外交能力の証とも言えます。その当初の通信使は秀吉の朝鮮侵略の軍勢が引き上げの折に日本へ連れ去った多くの俘虜人を連れ戻すことが目的で、帰国できた者は初めの3回の派遣で2000人ほどであったようです。その後の4回目以降は将軍の代替わりや世継ぎの誕生に際して、朝鮮側から祝賀使節として派遣されました。その回数は全12回(資料1)でした。このように朝鮮通信使は、正確には室町時代から江戸時代にかけてのものを指しますが、一般には江戸時代の12回を言うようです。

ここで、朝鮮通信使の江戸までの行程についてです。右がその経路図です。新しい将軍が襲職すると、対馬藩はそのことを知らせ通信使を要請しました。通信使は釜山から海路で対馬、壱岐に寄港し、赤間関(下関)を経て瀬戸内海に入り、鞆の浦、牛窓、兵庫などに寄港しながら大坂まで海路で進みました。大坂からは川御座船に乗り換えて淀川を遡航し、淀からは興、馬、徒歩で行列を連れ、陸路を京都を経て江戸へのルートをとりました(資料3)。近江国では関ヶ原の戦いで勝利した後に家康が通った道の通行を認許されました。その道は現在でも朝鮮人街道(野洲市から彦根市)とも呼ばれています。吉例の道であり大名行列の往来は許されませんでした。このルートの選定について、朝鮮人は幕藩体制の階層外であったこと、徳川家の天下統一の軌跡をたどりその武威を示したことの2説があります。そして、江戸城では朝鮮国王



朝鮮通信使の経路図

から将軍への国書の奉呈があり、数日後に将軍から朝鮮国王へ返信と礼物、使節一行へ礼物や礼銀が贈られて、通信使一行は帰途につきました。行程にかかった時間は、1719年を例にすると対馬から大坂の海路に45日間、大坂滞在に6日間、大坂から江戸の陸路に18日間ほどでした。全行程で8か月から10か月を要しました。

通信使の一行は400人から500人体制で、対馬藩からの案内や警護1500人ほども加わりました。江戸までの道中、歌や踊りを披露しながら行列をして文化使節団の役割も果たしました。今も経路の各地に当時の書画や詩文が残されており、文化人の交流もされました。また、一行の踊りを模倣したような演舞が伝承される(岡山県・唐子踊り等)など、朝鮮通信使ゆかりの地となっているところもいくつもあります。

この岡崎もその地の1つです。幕府は岡崎の旧水野邸を改装して「御馳走屋敷」と名付け、公式の接待をする、いわば岡崎藩の迎賓館^{もんいし}的な役割を果たしました。そして、朝鮮通信使の一行に対して、江戸から来た問慰使が将軍の最初の歓迎の挨拶をするなどの接待をしました。そのことはとても有名で、通信使も岡崎は「家康生誕の地」として特別の場所と認識していたようです。その中で、第4次通信使の正使任統は、岡崎宿の様子を次のように記しています。

たそがれどきに岡崎に到着した。此所は三河州の所属であり、城主は本多伊勢守忠智であるが、現在江戸に行っておるので、(略) 燈火を掲げること、挙動措置や接待の内容など、これまで通って来たところに比べて甚だ劣っていたが、物力が及ばぬところがあつてのことかも知れない。(略) 岡崎城外に虹橋があつて、其の名を矢作橋といつた。其の橋の長さは半里足らず、高さは船の帆柱が通れるくらいで、欄干の間数は四百五十間もあり、その間は八尺くらいもあつた。大坂以東の所所に長い橋があつたが、この橋のように勇壮なのはなかつた。
(『丙子日本日記』寛永13・1636年11月26日)

日記の内容は、全般的に出発地、到着地、宿所、接待などの記事で一貫し、岡崎の記述も同様で、接待の善し悪し、矢作橋の勇壮さのみとなっています。概要は、日本は未開の野蛮国という先入観で来日し、宿所の接待ごとに物資の豊富さ、将官の建物等の金箔・彩色塗りに驚きながら贅沢な生活を嘲笑し、農民の困窮を指摘しています。



御馳走屋敷があつたとされる場所

前述の御馳走屋敷は、文政9(1826)年の「家順間口書」によると、間口が15間(約27.3m)以上もある立派な建物でした。それは、現存する間取り図(資料2)から分かります。そもそも「御馳走」とは接待を意味する言葉で、この屋敷は公用の役人などを接待しました。特に勅使や宮様、御三家、老中、所司代、お茶壺、そして、この朝鮮通信使などの高位高官の一行が岡崎宿を訪れた時に使われました。その接待には岡崎藩から家老が出向いて丁寧に挨拶をしたということもあつたようです。

その御馳走屋敷の位置は、籠田公園南、岡崎信用金庫資料館の向かい側(伝馬1丁目、上写真)あたりでした。そして、明治4(1871)年、跡地に本校の起源となる「市学校」が設立されました。それから147年が過ぎ現在の駐車場となっています。

その後の朝鮮通信使は、接待の負担が大きかったため、文化8(1811)年に通信使の対応の場所を対馬に変更し、そこまで差し止めとしたのを最後に断絶しました。

今回は、『朝鮮通信使紀行』(杉洋子、集英社)、『新編岡崎市史』等を参考にしています。

○ 江戸時代の朝鮮通信使 【資料1】

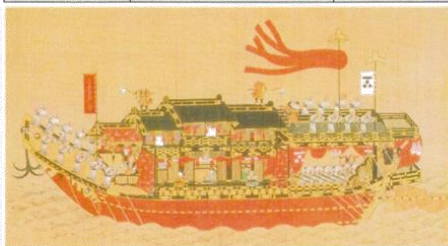
回数	西暦(元号)	将軍	正使	総人数	目的
第1回	1607(慶長12)年	徳川秀忠	呂祐吉	467	日朝国交回復 捕虜返還
第2回	1617(元和3)年	徳川秀忠	呉允謙	428	大坂の役による国内平定祝賀 捕虜返還
第3回	1624(寛永元)年	徳川家光	鄭崐	300	家光襲封祝賀 捕虜返還
第4回	1636(寛永13)年	徳川家光	任統	475	
第5回	1643(寛永20)年	徳川家光	尹順之	462	家綱誕生祝賀 日光東照宮落成祝賀
第6回	1655(明暦元)年	徳川家綱	趙珩	488	家綱襲封祝賀
第7回	1682(天和2)年	徳川綱吉	尹趾完	475	綱吉襲封祝賀
第8回	1711(正徳元)年	徳川家宣	趙泰億	500	家宣襲封祝賀
第9回	1719(享保4)年	徳川吉宗	洪致中	479	吉宗襲封祝賀
第10回	1748(寛延元)年	徳川家重	洪啓禧	475	家重襲封祝賀
第11回	1764(宝暦14)年	徳川家治	趙曦	462	家治襲封祝賀
第12回	1811(文化8)年	徳川家斉	金履喬	336	家斉襲封祝賀(対馬に差止)

○ 御馳走屋敷の間取り図 【資料2】



○ 朝鮮通信使の経路 【資料3】

地名	接待大名	宿所	現在の地名	
対馬府中	対馬藩宗氏	西山寺、国分寺	長崎県	対馬市
壱岐勝本浦	平戸藩松浦氏	勝本浦阿弥陀堂		壱岐市
筑前藍島	福岡藩黒田氏	藍島客館	福岡県	北九州市
長門赤間関	長州藩毛利氏	阿弥陀寺、引接寺	山口県	下関市
周防上関	長州藩毛利氏	上関御茶屋館(藩迎賓館)		上関町
安芸蒲刈	広島藩浅野氏	御茶屋(藩迎賓館)	広島県	広島市
備後鞆	備後福山藩	対潮楼(海岸山福禅寺境内)		福山市
備前牛窓	岡山藩池田氏	本蓮寺、御茶屋(藩迎賓館)	岡山県	瀬戸内市
播磨室津	姫路藩	御茶屋(藩迎賓館)	兵庫県	姫路市
摂津兵庫	尼崎藩、大坂町奉行	浜本陣、阿弥陀寺		尼崎市
摂津大坂	大坂町奉行 和泉岸和田藩岡部氏	西本願寺津村別院(北御堂)	大阪府	岸和田市
山城淀	山城淀藩	御馳走屋敷	京都府	京都市
山城京都	京都所司代、膳所藩	本国寺		京都市
近江守山	膳所藩石川氏 伊勢亀山藩石川氏他	東門院	滋賀県	守山市
近江彦根	彦根藩井伊氏	宗安寺(彦根城下)	滋賀県	彦根市
美濃大垣	大垣藩戸田氏	不明	岐阜県	大垣市
尾張名古屋	尾張藩徳川氏	大雄山性高院	愛知県	名古屋
三河岡崎	岡崎藩	御馳走屋敷(藩迎賓館)		岡崎市
三河吉田	吉田藩	不明	静岡県	豊橋市
遠江浜松	浜松藩	不明		浜松市
遠江掛川	掛川藩ほか	民家		掛川市
駿河藤枝	田中藩ほか	大慶寺		藤枝市
駿河興津	御馳走役大名	清見寺、御茶屋(迎賓館)		静岡市
伊豆三島	御馳走役大名	世古本陣		三島市
相模箱根	小田原藩	不明	神奈川県	小田原市
相模小田原	小田原藩	片岡本陣		小田原市
相模藤沢	御馳走役大名	蒔田本陣		藤沢市
武蔵神奈川	御馳走役大名	石井本陣		横浜市
武蔵品川	御馳走役大名	東海寺	東京都	品川区
武蔵江戸	将軍	浅草本願寺		台東区



海路(左)と陸路での朝鮮通信使の一行